
死を嘆かぬ者達への序曲

大沢崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死を嘆かぬ者達への序曲

【Nコード】

N0166D

【作者名】

大沢 崇

【あらすじ】

N市の港で内臓を抜かれた女性の遺体が発見された。刑事・廓純クルウ・ジュン志朗は被害者の最後の日の足取りを辿り始める。

序 (前書き)

グロかったりエロだったりするかもしれません。苦手な方は、
右して下さい。

序

濃灰色の夜空に雲は無く、
昼間の太陽と同じ軌道を描いて月が昇る。

淡い青色の八日月。

囁く声は耳の奥。

時に女が。

時に男が。

今は子供が歌っている。

死が我等を別つまで、

死が我等を分かつまで、

死が我等を判つまで、

死が我等を解つまで。

我等。

我等とは 何か。

そこに『我』は在るのか。

回答など、無い。

吹き込む風は甘美な薫りを孕み、墨色に染めた我が頭髪を乱す。

大時計の針は二つ重なり、高らかに鐘が鳴った。

明るい月に背を向けて、Black Peace Nowの服を
纏い、胸に琥珀のブローチを飾る。

膝まで隠す上着を羽織り、上着の下にトカレフを仕込んだ。

さあ。

狩りの時間だ。

A
m
b
e
r

灰色の雲が空を埋め尽している。

雨が来るのか、気温が低い。

クルワ・ジュンシロウ

廓純志朗はスーツの前を寄せた。

ナヤマ

奈耶麻港に吹く風は冷たく、この季節は万年真冬だ。吐く息こそ白くないものの、肌は粟立っている。

「…さむ……」

ポケットに手をつ込むと、傍に居た先輩が苦笑いした。

「暑いより良いだろ？」

「……まあ、」

確かに。

廓は目の前に転がる物を見下ろした。

内臓を抜き取られた女の遺体である。

現場の血痕は僅かで、別の場所で殺害された後に奈耶麻港廃コンテナ23号裏に遺棄されたのだろう。

遺留品は、遺体の左手首のブレスレットが1つだけ。

銀の鎖に水色の石を3つあしらい、銀色のプレートにシリアルナンバーらしき数字が刻まれている。

報告によると、それはある会員制の宝石店で受注販売されたものだった。

会員名簿から施前花乃霞セザキ・カノカと言う女性が購入した物であると分かった。

「確かに、私が妹の柚乃香ユノカに贈ったものです」

聞き込みに伺った際、施前花乃霞は証言してくれた。

施前花乃霞の妹・施前柚乃香は4日前から連絡が取れない状態にありつたと言う。自宅にも戻っておらず、友人の家にも行っていないとの事。

廓シオタ・マサヒロと相手の塩田将洋巡査部長は4日前の施前柚乃香の足跡を辿る事にした。

L a p i s l a z u l i

09:30

自宅マンションを出る。

施前柚乃香セザキ・ユノカの自宅は倫桎区ミチノに在り、そこは屈指の高級住宅地だった。

施前柚乃香は大学生だが、実家が資産家らしい。

そう言えば姉の施前花乃霞セザキ・カノカはテレビや雑誌でよく見る『セレブ』っぽい服装だった。「セレブっぽいとは何か」と尋ねられても返答し難いが、兎に角、セレブっぽいのだ。

施前柚乃香の自宅マンションもセレブっぽくて、オートロックの玄関には監視カメラが付いていた。何か異常があれば、管理室から警備員が駆け付けられるらしい。その管理室は壁1枚隔てて隣にある。壁をガラス窓にすれば監視カメラはいらないのではないかと思うのだが、それはプライバシーの関係で巧くないらしい。警備員に丸見えの窓は駄目で、監視カメラは良い。窓とカメラは結果的には同じだが、相手の顔が見えるのと見えないのでは大きく異なる。

「プライバシー、個人情報。他人との交流よりも独りの世界を重視するのは、今の時代の良くない部分だな」

塩田は管理室から玄関までどんなに急いでも20秒かかる事を知って呟いた。

20秒あれば刃物で人の脛動脈を切る事が出来る。窓があつて、そこから警備員の顔が見えていれば、それは起きないかもしれない。

「個人情報を守るべきです。見ず知らずの他人に自分の日常を知れるのは嫌じゃないですか。危険です」

「危険か？」

「若し、帰宅する時間を知られて、待ち伏せされて襲われたらどうします？」

「大声で助けを求めて、隣人に助けに貰えなかったらどうする？」

廓は返答出来なかった。

「ある程度の交流は必要だろう。部屋に上げる程までではなくても、会ったら挨拶するくらいはしても良いだろ。コミュニケーションがある程度出来ていれば、犯罪は半減する」

「確かに、そうですね……」

「それで？施前柚乃香は確かに9時30分に出たのか？」

廓は手帳を開き、警備員からの証言を読み上げた。

「監視カメラのビデオにも姿が確認出来ます。お姉さんの施前柚乃香さんにも見て貰いましたが、間違いのないようです」

「戻った姿は、無いか」

「9時30分にここを出て、それ以降の記録はありません。あ、今、アサメ浅間刑事の班が部屋を調べているそうですが、行きますか？」

「いや、いい。次に行こう」

そう言った後、塩田は鼻を動かした。

「何の匂いだ？」

「匂い？」

廓も大気の匂いをかいでみた。確かに、自然物と化学物の匂いがする。

「表の花壇のラベンダーと、隣のビルの塗装の匂いですよ」

ここに入る際にそれ等を見ていたので、廓自身は匂いなど気に留めていなかった。今更気付いたのかと、先輩刑事の感覚を疑う。

「そうか」

塩田は踵を反した。

「次はバス停だな」

「はい。そこから市立図書館です」

廓は塩田を追い掛けた。

歳の差故か脚の長さ故か、いつも塩田が先に行く。

それが廓は嫌だった。

L
a
p
i
s
l
a
z
u
l
i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0166d/>

死を嘆かぬ者達への序曲

2010年10月9日00時30分発行